

PAD を発症した透析患者に対する運動療法の有用性

医療法人 康仁会 西の京病院 診療支援部 リハビリテーション科¹⁾ 臨床工学科²⁾

透析センター³⁾

湯浅悠樹¹⁾ 上村将太¹⁾ 本庄真子¹⁾ 明道知己¹⁾ 野口 幸²⁾ 山岡みゆき³⁾ 吉岡伸夫³⁾

【緒言】

PAD による跛行を発症した患者に運動療法を導入し、その効果を検討した。

【対象と方法】

透析患者 9 名を対象とした。運動療法はレジスタンス運動、歩行訓練を、週 2 回実施し導入 2 か月後で評価した。評価法は関節可動域検査、6 分間歩行、運動療法前後で SPP を測定した。

【結果】

足関節背屈は、前 5.7 ± 7.9 、後 10.5 ± 7.2 度。底屈は前 35.0 ± 12.9 、後 42 ± 6.1 度と可動域が有意に改善した ($P < 0.01$)。6 分間歩行は、前 161.8 ± 124.5 、後 205.0 ± 115.6 m と歩行距離が延び ($P < 0.01$)、SPP は、前 53.6 ± 20.2 、後 61.3 ± 19.1 mmHg と有意な改善を認めた ($P < 0.01$)。

【結語】

運動療法は下肢動脈の血流を促すことで跛行が改善し、歩行距離の延長に繋がったと示唆された。また ROM 改善は身体機能の向上にも有効であると考えられた。